ISSN 2433-7013

日本リハビリテーション教育学会誌

第 6 巻 特別号 2 号 2023 年

第 19 回 日本リハビリテーション教育学会学術大会

大会テーマ:「ひかりを灯(とも)す教育」

日 時:2023 年 12 月 23 日(土)

会 場:国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス

(住所 : 東京都港区赤坂 4-1-26)

大会長:丸山 仁司 (福岡国際医療福祉大学)

NPO:Rehabilitation Academic center (RAC)

The Society of Japan Rehabilitation Education

第 19 回日本リハビリテーション教育学会学術大会（東京赤坂）
テーマ:『ひかりを灯（とも）す教育』

2023 年 12 月 23 日（土）
国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス（東京都港区赤坂 4-1-26）
ZOOM 情報:
https://zoom.us/j/94758772082（12:45 より入室可）
ミーティング ID: 947 5877 2082　パスコード: tokyo1223

◆　開会　堀本ゆかり（日本リハビリテーション教育学会）

13:05　教育講演Ⅰ　「五光を灯す教育」
福岡国際医療福祉大学　副学長　丸山　仁司　先生・・・1
座長：国際医療福祉大学　福岡保健医療学部　後藤 純信

13:40　教育講演Ⅱ　「ひかりを灯すしま」
順天堂大学医学部附属　静岡病院　河原　一剛　先生・・・1
座長：医療法人おもと会　大浜第一病院　石野　麻衣子

14:50　一般演題 Ⅰ（口述発表）　座長：国際医療福祉大学　小野田　公

1. 教育の標準化に向けたトレーニングマニュアル作成の試み
医療法人社団東光会戸田中央リハビリテーション病院　白井 秀忠・・・2

2. 理学療法学生の志望動機と生涯学習への関心および自己効力感に関する調査研究
～総合臨床実習前後での変化に着目して～
九州中央リハビリテーション学院　岸本 稔・・・3

3. 理学療法学科学生の非認知能力と学業成績との関連　－ 時間的焦点とグリットに着目して －
学校法人巨樹の会　福岡和白リハビリテーション学院　佐々木 圭太・・・4

15:35　一般演題 Ⅱ（口述発表）　座長：国際医療福祉大学　医学部　後藤 純信

4. 看護補助者の視点から見た作業療法士の役割・認識調査
医療法人社団葵会　AOI 七沢リハビリテーション病院　佐野 智史・・・5

5. 理学療法士の自己調整学習方略における課題の把握
伊東市民病院　廣川 裕人・・・6

6. 作業療法学科学生における自己調整学習方略と学業的援助要請の調査
－ 学業成績との関連に着目して －
九州医療スポーツ専門学校 峯﨑 佳世子・・・7

◆　閉会　丸山　仁司（第 19 回日本リハビリテーション教育学会　大会長）

◆　教育講演Ⅰ　「五光を灯す教育」

福岡国際医療福祉大学　副学長　丸山　仁司　先生

MEMO

◆　教育講演Ⅱ　「ひかりを灯すしま」

順天堂大学医学部附属　静岡病院　　河原　一剛　先生

MEMO

◆　口述演題　1

教育の標準化に向けたトレーニングマニュアル作成の試み

白井秀忠
医療法人社団東光会戸田中央リハビリテーション病院

【背景】これまで新入職者及び中途入職者（以下、学習者）の教育は、指導者の知識や経験則に基づく属人化により、教授される内容に差異が生じていた。また、未修得業務があるにも関わらず、修得済み業務の更なる質の担保に時間を割く等、教育コストの配分に課題を抱えていた。指導者からは「何を、どのように教育すれば良いかが分からない」という声も挙がっていた。差異の解消には教育の進め方を統一し、手順を最適化する必要があった。
【目的】当院入院患者に係る入院から退院までの業務フローにおける教育の標準化を図る。修得する必要のある業務や修得に向けた優先順位を明確かつ統一し、属人化による教育の差異の解消に繋げる。なお、発表にあたり個人が特定できないように十分な倫理的配慮を行うとともに、所属施設の倫理委員会の承認を得た。
【方法】回復期リハビリテーションにおける基本的業務の修得を目標とした実務評価及び接遇に関するトレーニングマニュアルとチェックリストを整備した。昨年度より当該ツールを用いて指導者に説明を実施し、学習者の修得段階を指導者に評価してもらうようにした。進捗に関しては、教育管理者が指導者と年に 3 回（入職後 1 ヶ月、6 か月、12 か月）面談にて確認し、フィードバックした。また、その面談内容は記録に残し、経時変化を振り返ることができるようにした。
【結果】昨年度に当該ツールを整備したことで学習者の基本的業務及びその修得状況を可視化することができた。それに伴い指導者からの声も「何を教育するのか、どのように教育を進めれば良いかが明確になった」と変化がみられた。教育管理者の立場では、教育の進捗状況を第三者的に把握しやすくなったことで、未修得事項に対する教育の進め方を指導者と振り返る際にも活用できた。
【考察】標準化に対する教育ツールの整備は有用であり、指導者が学習者の成長度合いに応じた教育を行えているかを振り返り、改善していくことにも寄与できると考えられる。今回マニュアル整備による指導者の教育への意識変化等をアンケートで聴取していなかったため、今後は前後比較に向けて実施していきたいと考えている。
【結語】指導者の属人化を背景として、指導者の教育に差異が生じていたため、基本的業務の修得状況を標準化するためにトレーニングマニュアルやチェックリストを整備するに至った。教育事項及び進め方を可視化したことにより、学習者の個別性に応じた教育の展開にも繋げていけるのではないかと推察している。

◆　口述演題　2

理学療法学生の志望動機と生涯学習への関心および自己効力感に関する調査研究
～総合臨床実習前後での変化に着目して～

岸本 稔[1)2)]　金子秀雄[3)]　堀本ゆかり[3)]

1）九州中央リハビリテーション学院　2）国際医療福祉大学大学院 修士課程

3）国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】理学療法学教育モデル・コア・カリキュラムでは，専門職として，生涯学習に取り組み続けることの重要性が示唆されている．しかし，当学学生において，志望動機そのものが曖昧で生涯学習に対して無関心であり，自己効力感が低いと感じるケースが散見される．そこで，理学療法士を目指した志望動機の程度と生涯学習に対する関心，および自己効力感を調査し検証した．また，総合臨床実習が学生にとって大きな行動変容の起点になると考え，実習前後で，これらを比較し，変化の傾向性を探り，学内教育および理学療法士として巣立つ学生の就職前教育の一助とすることを目的とした．

【方法】対象は，2023 年度，本学に在籍する理学療法学科最終学年生：63 名　平均年齢 23.2±4.4 歳とした．理学療法士を目指した動機づけの程度を，理学療法士学生向けに改変されたライフコース展望動機付け尺度を用いて評価し，生涯学習に対する関心は，内閣府が実施した世論調査を一部改変しアンケートを実施した．学生の自己効力感は，　General　Self-Efficacy Scale（以下 GSES）を用いて評価した．統計処理は正規性を確認した後に，差の比較に Wilcoxon の符号付順位検定を適応した．また，GSES を指標とし向上群・維持群・低下群に分け，群間内の差の比較に Wilcoxon の符号付順位検定を適応し,3 群間の比較に Kruskal-Wallis 検定を用いた．

【倫理的配慮】本研究に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない．また，九州中央リハビリテーション学院倫理審査委員会より承認を得て実施している（承認番号：2782）．

【結果】実習前後比較において，ライフコース展望動機づけ尺度の統合的調整に有意差を認めた．　GSES は有意差を認めなかったが，標準偏差が 1.22 から 0.62 と変化した．群間内の前後比較では向上群の内発的動機づけ，低下群の統合的調整に有意差を認めた．3 群間の比較で要因全体の差が有意であったものは，内発的動機づけと統合的調整であった．生涯学習への関心調査では，前後比較で全体的な傾向は変わらないという結果となったが，内閣府の調査と比較すると，職種に関連する分野に対する関心が非常に高いという結果であった．

【考察】結果より，総合臨床実習で学生は外部から様々な刺激を受けることで統合的調整が有意に高くなり，内発的動機づけは自己効力感を高める因子になることが示唆された．また，学生は在学中から生涯学習への関心を有しており，就職後も理学療法士としての成長を望んでいると思われた．

【結語】在学中から理学療法士として生涯学習に対する関心を有する学生が多数であったことを喜ばしく感じるとともに，学内教育で動機づけの程度に着目し学生の自己効力感を高めるという視点を持つことが重要であると感じた．

◆　口述演題　3

理学療法学科学生の非認知能力と学業成績との関連-時間的焦点とグリットに着目して-

佐々木圭太[1)2)]　金子秀雄[3)]　池田拓郎[3)]　堀本ゆかり[3)]
1)学校法人巨樹の会福岡和白リハビリテーション学院　2）国際医療福祉大学大学院修士課程
3)国際医療福祉大学大学院　医療福祉教育・管理分野

【研究背景と目的】学生の学業成績を決定する要因に知能や学力を指す認知能力がある一方、人生における成功を左右する要因として非認知能力の重要性が指摘されている。非認知能力は様々な心理学的特性を指すが、変容のしやすさを有し、よい結果に結びつくという共通点があるとされ、人々が過去、現在、未来に向ける注意の量を指す時間的焦点や、一貫した興味を持ち粘り強く努力する能力を指すグリットが含まれる。本研究は学業成績、時間的焦点、グリットの関連性を検証することを目的とした。
【方法】専門学校に在籍する理学療法学科 1、2 年生を対象とし、日本語版時間的焦点尺度(TFS)、日本語版グリット尺度（GS）の質問紙調査を行った。学業成績は本試験得点をもとに fGPA を算出した。対象科目は専門基礎科目と専門科目とした。fGPA と各尺度の相関解析は Spearman 順位相関係数、焦点群別 fGPA 分布は Kruskal-Wallis 検定を用い、いずれも $p<0.05$ とした。
【倫理上の配慮】本研究は福岡和白リハビリテーション学院倫理委員会の承認を得て行った（承認番号 FW-23-01）。
【結果】分析対象を 233 名（1 年生 112 名、2 年生 121 名）とした。1 年生では TFS 現在焦点と fGPA に弱い正の相関がみられた。2 年生では未来焦点と努力の粘り強さにおいて弱いながら fGPA と正の相関を認めた。両学年とも、未来焦点と現在焦点はそれぞれ努力の粘り強さと有意な正の相関を示した。また TFS 総得点と努力の粘り強さが有意な正の相関を示した。この相関は特に 2 年生の fGPA 高スコア群においてやや強い結果となった。一方、各時制の焦点平均と興味の一貫性の間には全体的に弱い負の相関を認め、特に 2 年生の fGPA 低スコア群でその傾向が強かった。
【考察】明確な目標がよい結果につながることは多くの研究で示されている一方、ハプンスタンス学習理論ではキャリア形成に計画は必ずしも必要でなく、行動から生まれる偶然のチャンスでスキルや知識が身につくとされている。1 年生では現在の履修内容や自分に注意を向けながら起こした学習行動が結果的によい形で成績に反映された可能性が考えられる。研究対象校では 1 年次末の見学実習を通し理学療法士としての自分を想起する機会がある。2 年生はこの経験による学習意欲の変化が成績に影響を与えたと思われる。また臨床的内容を多く含む科目を学ぶことが将来を意識する機会につながった可能性もある。研究対象校では資格取得に向けた継続学習の重要性が 1 年次から指導されている。基礎、専門の科目間の連続性も教示されていることから両学年とも未来と紐づけて現在に注意を向ける機会があり、両時制への注意が学習の粘り強さに影響した可能性がある。
【結語】1、2 年生で成績と関連する非認知能力が異なること、また成績によって非認知能力がどう影響するかが異なる可能性が示された。各学年、各学生への教育手法を検討する上で、非認知能力への配慮が有用であることや、非認知能力を育む視点を持つことの意味が示唆された。

◆　口述演題　4

看護補助者の視点から見た作業療法士の役割・認識調査

佐野智史[1)2)]　谷口敬道[3)]　堀本ゆかり[3)]
1)医療法人社団葵会　AOI 七沢リハビリテーション病院 2)国際医療福祉大学大学院修士課程
3)国際医療福祉大学大学院　医療福祉教育・管理分野

【目的】当院の外国人看護補助者が作業療法士，理学療法士(以下 OT，PT)を呼ぶ時，「リハさん」と呼称することが多い．日本人と外国人看護補助者とのチーム医療連携の強化を進めるためには，言葉の壁の他，各専門職の役割や認識教育が必要と考える．本研究は，日本人と外国人看護補助者の視点から見た作業療法士の役割・認識調査と OT，PT を「リハさん」と呼称する原因を明らかにすることを目的とする．

【方法】対象者は当院に勤務する看護補助者約 60 名とし，同意しない及び無効回答を除く 56 名(日本人 34 名，外国人 22 名)を分析対象とした．方法は自記式のアンケート調査とし，選択回答方式と自由記載で回答を得た．自由記載の分析には，KH coder(Ver.3)によるテキストマイニングを用いた．

【倫理的配慮】本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会(承認番号：23-Ig-59)，AOI 七沢リハビリテーション病院倫理審査委員会(承認番号：23-001)より承認を得て実施した．本研究における利益相反(COI)はない．

【結果】「リハさん」と呼称する主たる原因は，「スタッフが多く名前が覚えられず，簡単で呼びやすく，周りがそう呼んでいるから」であった．カテゴリー分析では「日常生活動作の支援」，「上肢・手先の専門的リハビリ」，「創意工夫と患者様の自立支援」，「応用動作・社会復帰への支援」と 4 つのカテゴリーが生成された．

【考察】名前を覚えられず「リハさん」と呼称するものの，看護補助者と療法士間で職種間連携を密に行っていきたい姿勢が見られた．4 カテゴリーの結果は日本作業療法士協会が提示している作業療法士の定義とほぼ同義で，作業療法士の認識・役割に対して一定の理解が得られていると示唆された．

【結論】
職種間連携にはお互いのことを名前で呼び合う習慣をつけ，看護補助者もカンファレンスの参加や普段の些細な情報共有が職種間コミュニケーションの向上，療法士職との連携強化に繋がる．

◆　口述演題　5

理学療法士の自己調整学習方略における課題の把握

廣川裕人[1)2)]　小野田公3)　堀本ゆかり3)
1）伊東市民病院　2）国際医療福祉大学大学院 修士課程
3）国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】理学療法学教育では「自ら学ぶ力」の育成が重要視されているが，これをどのように育成するのかについては議論が十分ではない．そのため本研究では，理学療法の卒後教育における「自ら学ぶ力」の育成方法を模索すべく「理学療法士の自己調整学習方略における課題の把握」を目的とした．但し本研究では，まず当院の理学療法士を対象とした課題の把握を目的としている．
【方法】対象は当院に所属する理学療法士16名である．調査内容は，基本属性（4項目）および理学療法士の自己調整学習方略尺度（35項目）とした．分析は課題を検討するために，基本統計量を算出した．また，課題を持つ者の特徴を捉えるために，基本属性を群分けし，Mann-Whitney U検定とKruskal-Wallis検定にて差を求めた．

【倫理的配慮】伊東市民病院倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：20230908-1）．

【結果】尺度の回答結果から，「向上志向的学習方略」とその項目の全9項目，「協同学習方略」とその項目の5項目中3項目，「専門職アイデンティティ基盤的学習方略」の11項目中5項目の，合計2因子17項目が低い値であった．差の検定結果では「向上志向的学習方略」と「専門職アイデンティティ基盤的学習方略」はいずれの群でも有意差は認めず，「協同学習方略」は男性群，6年目以上群，役職者群が有意に低い値であった．

【考察】結果から，①向上志向の欠如・②学習における協同性の欠如・③専門職アイデンティティ形成の一部遅延や欠如という3つの課題が挙げられた．これら課題の解決には，動機づけの調査や自律性を高めていく教育方法の検討，協同学習の認識調査や実践方法の検討，レディネスの形成やモデルの提示といった取り組みが必要と考えられた．また①・③は対象者全体の課題であり，②は男性・6年目以上・役職者を中心とした課題であったため，課題ごとに対象者を区分して解決していく必要性が示唆された．

【結論】①向上志向の欠如・②学習における協同性の欠如・③専門職アイデンティティ形成の一部遅延や欠如という3つの課題が挙げられた．課題の解決に向けた取り組みについて，今後組織内で検討するとともに，質的研究も展開していく．

◆　口述演題　6

作業療法学科学生における自己調整学習方略と学業的援助要請の調査
～学業成績との関連に着目して～

峯﨑佳世子[1)2)]　小野田公[3)]　堀本ゆかり[3)]
1）九州医療スポーツ専門学校　2）国際医療福祉大学大学院 修士課程
3）国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】近年、作業療法士の養成校が増加したことや少子化の影響により一定の学力に達していない学生が増え、学業不振による留年や中退、国家試験の合格に難渋するケースが増えている。作業療法士として必要な知識や技術を習得し国家試験に合格するためには、効果的な学習方略を身に付ける必要があるといえる。本研究は、自己調整学習方略および学業的援助要請と学業成績との関連を明らかにし、各学年の特徴を把握することを目的とした。
【方法】対象は 3 年制リハビリテーション専門学校作業療法学科に在籍する学生 64 名（1 年生 23 名、2 年生 19 名、3 年生 22 名）とし、調査方法は Google forms を使用し、WEB 上でのアンケート調査を実施した。
調査内容は基本属性（3 項目）、自己調整学習方略尺度（18 項目）、学業的援助要請尺度（11 項目）、自由記述（4 項目）とした。
学年間の比較は一元配置分散分析、自己調整学習方略、学業的援助要請と学業成績との関連についてはスピアマンの順位相関係数にて行った。有意水準は 5%とした。
【倫理的配慮】本研究は九州医療スポーツ専門学校倫理審査委員会の承認を得て実施している（承認番号：23001）。調査実施にあたり対象者には書面および口頭にて説明を実施し、アンケート内に同意の確認項目を設けることにより回答をもって同意の最終確認とした。
【結果】自己調整学習方略、学業的援助要請の得点は学年間での差は認められなかった。自己調整学習方略および学業的援助要請と学業成績との相関に関して 1、2 年次では学業成績との関連は認められなかったが、3 年次では、「モニタリング方略」「認知的方略」「プランニング方略」「努力調整方略」「自律的援助要請（教員）」「自律的援助要請（友人）」との間に有意な正の相関が認められた。その他は有意な関係性は認められなかった。
【考察】3 年次は科目期末試験ではなく国家試験に準じた問題を使用した。作業療法士国家試験には基礎分野、専門基礎分野と専門分野から出題される。基礎分野、専門基礎分野は記憶に基づく内容が多く出題されている。しかし、専門分野は臨床場面を想定した内容も出題され、単に記憶だけでは正答を導き出せないものがあり、自身に適した自己調整学習方略と自律的援助要請の方略を習得したと考えられる。
【結語】今回は横断調査であったが、縦断調査を重ねて学年ごとの学習方略の変化や学業成績との関連を検討する必要がある。また、今回は前期終了後の調査結果であるため、今後は養成校入学時に高等学校までに使用していた学習方略を把握し、1 年次よりスムーズな支援へとつなげていきたい。